

多様性

吉崎正弘

ドメイン管理

インターネットの自由と規制に関する国際的な議論が喧しくなってきてている。

もともとインターネットは、自分のコンピュータを他人のコンピュータとつなぎ、情報を共有したりコラボレーションを図るために閉塞的なLANとしてアメリカで始まった。したがって、通信手順（プロトコル）のような技術的な最小限度のこと以外、身内のことなので全てが自由であった。ただ、アドレス・ドメインが重複するとコミュニケーションが混乱するので、一定の規則でドメインを管理する必要が出、後から接続する人は先行者と重複しないようにルール化された。このドメインを管理するのがICANという民間の組織であるが、インターネット誕生当時は多くの国が使うものでもなかったので、アメリカを中心に、ヨーロッパや日本などの先進国が関与して管理することでスタートし、継続してきた。

セキュリティ

情報選択肢をより多様化させるためLANとLANの接続が進んだが、一方で「閉塞的身内性」は低下し、無署名性に基づくハッカーやウイルスが出てきた。「他人のコンピュータを覗いたりネットに対して悪戯をするのも自由だ」という意見もないわけではないが、「自由な情報流通を阻害する自由はない」という意見が大勢ではある。ただ、ハッカーなどを特定し、悪戯を止めさせることは技術的に難しく、悪戯されないようにセキュリティを万全にして防御するぐらいしかできないのが現実である。

これが電話網の交換サービスと異なるインターネットの宿命的弱点である。ウイルスとセキュリティのイタチゴッコは続いており、セキュリティ・ソフトは重くなってきた。そして、だんだんコンピュータの情報処理能力に占めるセキュリティ機能のウエイトが高まり、CPUの処理速度の高速化を加速させる一因にもなってきた。そして、これからもこのトレンドは続く。

アラブの春

インターネットは次第に広がり、特にケータイ利用により地球規模に爆発した。従来は不可能だった広範な瞬時のコミュニケーション・情報利用が可能になった結果、「アラブの春」という現象が起きてきた。

民主主義が未成熟な国にあっては、権力側がマスメディアに圧力をかけ情報を統制したり、通信を不自由にさせることにより体制を維持してきたが、ケータイ・ネットの普及はそれを不可能にし、一丸的反権力の瞬間的コミュニケーションにより民主化が進んだ。

しかし、権力が保身に走ることは否定できない。「不適切な情報で国家体制を転覆せることは望ましくないので、その流通を否定することは当然である」とい意見の国は多く、言論弾圧の国は存在する。情報統制が国内でとどまっているならばそれは「国内問題」で済むが、インターネットに国境はない。このようなことから、民主主義が未成熟で権力が不安定な国ほど、「不適切なインターネット情報は国際的に規制されるべきだ」と言いたくなるのである。

しかし、民主主義な先進諸国ではそうはいかない。「インターネットによる自

由な情報流通は保障されるべきであり、ドメイン管理やセキュリティなど自由な情報流通のために必要な最小限度なルールに留め、それも権力的ではなく誰でもが参加できる自由な体制（マルチステークホルダー）で講ずるべきだ」という伝統的な意見に固執せざるを得ないのである。

特に、「不適切な情報」というものは相対的である。たとえば、イスラム諸国ではアルコールは法度であるが、日本ではそうではない。美味しい地酒を開発しそれをネットで紹介すれば、求める愛飲家と酒造家はワイン・ワインになれる。アルコール推奨情報はイスラムの人にとって迷惑なものかもしれないが、国境を超えるからと言つて地酒の情報提供を禁止することが日本国内の常識からして不可能なことも論を待たないのである。不適切情報か否かはそれぞれである。

ワールドカップ

日本にいても個々人の意見の相違は日々感じるが、そうはいっても国内では共通の教育や文化によってある程度考え方は均質化している。しかし、国際会議に出ると、「同じ人間なのに、どうして国によってこんなに考え方違うのか」と思つてしまふ局面に出会うことがある。

一般的に国とは、「共通の言語・価値観を持つ人たちによって構成される一定の土地」といえるように思うが、インドには20を超える言語が存在するし、価値観は個人によって千差万別ともいえる。「国とは何か」と考えてしまうのである。

特にワールドカップを見ていると、選手の国籍・いつも所属しているチームの国籍、そしてその選手が代表となっている国がズレていることが多く、世界の人々は自



コブヤハズカミキリ

Mesochthistatus binodosus (WATERHOUSE)

2013年6月1日 長野県長野市富士の塔 体長20.2mm



下翅が退化し飛べない。加えて、体長を収縮する方向に進化したため、上翅がコブ状に隆起しゴツゴツした感じのカミキリムシである。その分、足が発達し歩行能力は優れている。以前は生態が不明なため珍品であったが、食べ物であるブドウ類の濡れた枯葉に潜んでいるところを秋季に叩き落とすことで比較的容易に採集できるようになった。

写真の標本は、有線放送課OBの旅行の際、6月という採集があまり期待できない季節に路上を歩いているのを見つけたものである。狙って採るのもイイが、偶然出くわすのもイイものである。

国の国旗を無邪気に応援しているのではないかと思ってしまう。

国境

そもそも現代人が不可侵的に思っている絶対的な国境線であるが、本来相対的なものである。統治者がいる都の周辺では統治は厳格であるが、遠くなるに従いその機能は次第に及ばなくなり徴税等の限界が一応の国境となった。それは山や川や海などの地理的な移動限界でもあった。明確な線というよりは、統治が次第にグラデーション的に及ばなくなる帶であり、国境の中には一定の秩序と完全な満足には至らなくても一定の満足・平和があった。

権力と権力の間にはどちらにも属さない空白地帯があった。倭寇は日本の海賊であったという見方もあるが、日本にも中国にも韓国にも属さないマージナルマンだという考え方もあるように…。

歴史は下り、交通手段の更なる発達により、統治範囲は次第に広域化し、そのうち権力と権力が激しくぶつかり大きな戦争が起こるようになった。戦争後、勝敗国の考えをベースに相互不可侵の境界線が設定され、線としての国境が人為的に決められた。空白地帯はなくなったのである。

人間が決めたことは人間が直すことができる。領土を巡り戦争が再び起こり、終戦後国境は見直された。そして、人類は戦争を繰り返し、兵器の高度化が悲惨さを増した。現在のウクライナもそうであるが、それぞれの言い分にはそれぞれの合理性があり、解決は難しい。

近くの人は比較的近い価値観や共通の利害を持っているし、遠くの人と会ってコ

ミュニケーションするのは大変である。異文化の交流には相互理解するための時間的余裕があったが、インターネットではリアルタイムで全ての情報にアクセスでき、遠くの国の情報も関係ない。インターネット管理を巡る現在の国際的な議論の高まりは、リアルタイムの異文化交流に対する戸惑いともいえる。

棲み分け

全く別々の種であっても、昆虫たちは上手に棲み分けている。たとえば、同じ時期に同じ場所で同じ食物を食べる昆虫が複数種いると競合してしまい、両立しない。弱い種は絶滅せざるを得ないが、たとえば発生の季節が違えば大丈夫である。また生息区域が異なれば問題ない。

たとえば、コブヤハズカミキリ類は数種に分かれているが、フォッサマグナの東側の本州に住むコブヤハズカミキリ、近畿以東フォッサマグナまでのマヤサンコブヤハズカミキリ、山梨県～長野県東部のフジコブヤハズカミキリ、長野県西部のタニグチコブヤハズカミキリに棲み分けており、それぞれの境界にはわずか数百メートルのいずれも生息しない区域が線状に続いている。カミキリ屋はこれを「非武装地帯」と呼んでいる。稀に崖崩れなどで非武装地帯が崩れ混在区域ができ交雑種が出る場合もあるが、生殖能力が高くないためかいずれどちらかの種に統一され、また、非武装地帯が成立する。飛び道具もなくインターネットもないのに、非武装地帯は有效地に機能しているのである。

オモテナシ

肌の色など多少の違いはあるが、ヒト

は一つの種である。しかし、生まれ育った環境（それを支えるのが歴史・文化）により、価値観は多様である。このような後天的な要因で殺し合う生き物は他におらず、人類の特異な愚かさということができる。

各国を回っていて感じるのは、アジアの国は他に対して寛容性が高いことである。歴史的には多神教から一神教が生まれ、より純化したものと言われているが、それだけに排他的なところは否定できない。様々な神が混在し棲み分けている多神教の方が他への受容性が高く、多様を尊重するのが「多神教的アジア・テイスト」であるように感じられる。アジアの東端の島国はその極致であり、他の価値に対する深い配慮が日本人の「おもてなしマインド」の神髄であるように考えている。世界に対して自信を持てる日本人の特長であるように思われる所以である。

ただ、島国固有の閉鎖性はいまだに強いところは否定できない。国技だからと言つて外国人を排斥しなかったからこそ、大相撲も高い競技レベルを保ち続けることができ、日本人以上に日本的な白鵬という大横綱も輩出した。極東の島国だけに我が国はあまり考えてこなかったが、ただ外国との交流を活発にする「国際化」から、国籍を超えた人類の交流という意味での「インターナショナル」に考え方を切り替える時期がそろそろ来ているように感じる。2020年の東京オリンピックがその転換点になればと願っている。それまでには日本語の壁を低くする自動翻訳も広く普及するであろう。

ずいぶんと多くの国を回り会得した境地であるが、時差・温度差・言語相違にはもうかなり疲れた。今回あまりムシップクない話しになってしまったが……。

